

キリスト者の夢—神の国—

ルカによる福音書 11 章 14 節-23 節

賈 晶淳

人それぞれに夢があるように共同体にも夢があると思います。今日のキリスト者一人ひとりに共通の夢がありましたら、それが共同体の夢だと思います。

マルコによる福音書ではイエスが活動を始める最初の宣言を「時は満ち、神の国は近づいた」（マルコ 1 の 15）と記しています。この宣言の中の「神の国」がイエスの夢であり、キリスト者の夢だと思っています。自分にとってもこの「神の国」が信仰の基であり、牧師としての 40 年間の夢でありました。

福音書では「神の国」がイエスの教えの中心であり、多くの「たとえ話」の目的は人々に「神の国」の秘密を悟らせるためであると説明しています（ルカ 8 の 10）。また、「奇跡物語」も「神の国」との関連性が深く、ある意味では神の国の体験学習として受け止められると思います。ということから本日の証詞の題を「キリスト者の夢—神の国—」とし、聖書は奇跡物語から選びました。

「神の国」がキリスト教の 2 千年間のキリスト者の夢であったことを確認できるものはイエスが教えた「主の祈り」であると思います。

ルカによる福音書では 11 章の 1 節から「主の祈り」について記されていますが、マタイの「主の祈り」より簡略に記されているのが特徴です。

11 章 2 節から 4 節です。

そこで、イエスは言われた。「祈るときには、こう言いなさい。『父よ、御名が崇められますように。御国が来ますように。わたしたちに必要な糧を毎日与えてください。わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから。わたしたちを誘惑に遭わせないでください。』」

初めに神の名を讃美し、最初の願いとして「御国が来ますように」と祈ります。ここで「御国」とは「神の国」のことです。即ち、「主の祈り」を祈る全ての人にとって「神の国」は第一の願いであり、2 千年間変わらない夢であったこととなります。

マタイの「主の祈り」ではこの祈りの後「御こころの天になるごとく地にもなさせたまえ」と続きますが「神の国」は地上でのことを言います。

ルカの「主の祈り」の続きは、「わたしたちに必要な糧を毎日与えてください」です。今を生きるのに最も必要なものは日毎の糧です。福音書における 4 千人（マルコ 8 の 1 以下）と 5 千人（ルカ 9 の 10 以下）の共食事件はまさに共に食を分かち合う奇跡物語として「神の国」を体験する貴重な学習の場であったと考えられます。その共食学習はイエスの活動期間中に繰り返し行われたと思います。各自が自分の持ち物を隠さず分かち合える気持ちになれたのはその場に神の働きがあったからでしょう。

その後「わたしたちの罪を赦してください、わたしたちも自分に負い目のある人を皆赦しますから」と主の祈りが続きます。この内容は神と隣人との関係回復を願うものです。互いの過ちなどを赦し合う関係を表しているのですが、奇跡物語の主な主人公となる病や障がいなどを抱えている人々との関係も含まれていると考えられます。長い間人々は病や障がいの原因が罪にあると考えて来たことに對し、イエスはその考え方を否とした上、神の業、神の国の働きのためであると教えています（ヨハネ 9 の 1 以下）。

ルカによる福音書の本日の内容はイエスがある人から口を利けなくする悪霊を追い払う奇跡物語です。耳が聞こえず言葉を出せなかった人の耳と口が開き、人と話し合えるようになったというこの驚くべき事件とは、まさに関係回復という重要条件として理解すべきことでしょう。

続く 17 節、18 節には悪霊同士の分裂のことが記されています。

イエスは彼らの心を見抜いて言われた。「内輪で争えば、どんな国でも荒れ果て、家は重なり合って倒れてしまう。あなたたちは、わたしがベルゼブルの力で悪霊を追い出していると言うけれども、サタンが内輪もめすれば、どうしてその国は成り立って行くだろうか。」

悪霊が支配する、要するに力が支配することによって共存が難しくなるということですが、当時のユダヤ人一般にとって、この悪霊とは具体的な存在で、ローマ軍やその手先機関であるヘロデ王でありました。また、神殿の祭司や律法学者、ファリサイ派の人々のような宗教的エリート集団でもありました。彼らは当時の民衆を物理的力や宗教的条項をもって支配し、社会と自我における分裂を助長していました。祭儀や律法は異邦人のみではなく同族を分裂させ、支配する道具として働き、それらを悪霊と考えていたと思います。この奇跡物語における治癒行為は神の働きとして関係を是正し、回復を行なうものです。

続く 20 節には「神の指」と「神の国」が記されています。

しかし、わたしが神の指で悪霊を追い出しているのであれば、神の国はあなたたちのところに来ているのだ。

ここでの「神の指」はマタイによる福音書の並行箇所 12 章 18 節では「神の霊」となっています。「神の霊」が働く場では「神の国」が来ているのだというのです。

今回ルカによる福音書で「神の国」を調べたところ全ての箇所に関連する面白い発見をしました。先ず、6 章 20 節です。

さて、イエスは目を上げ弟子たちを見て言われた。「貧しい人々は、幸いである、神の国はあなたがたのものである。」

神の国は貧しい人々のものであるということです。いろんな解釈ができると思いますが、言葉をそのまま理解しますと、イエスは貧困という経済的な困難を、具体的に日用の糧が足りない人々の問題とし関心を向けています。同時にこれらのことが神の国と関連しているというのです。

そして、10 章 9 節です。

その町の病人をいやし、また、「神の国はあなたがたに近づいた」と言いなさい。

ここでは弟子たちを町々に派遣しながら病人を癒し、神の国が近づいたと言うように勧めています。即ち、弟子たちにも社会的弱者に優先的に関心を持つように勧めているのです。先と同じくここでも「神の国が近づいている」と宣べ伝えているのです。

最後は 17 章 20 節 b、21 節です。

「神の国は、見える形では来ない。『ここにある』『あそこにある』と言えるものでもない。実に、神の国はあなたがたの間にあるのだ。」

「神の国はあなたたちの間にある」というイエスのこの宣言は驚くべきものです。もはや「神の国」が私たちの夢であることを否定できないと思います。

最後に 21 節と 22 節のところでは。

強い人が武装して自分の屋敷を守っているときには、その持ち物は安全である。しかし、もっと強い者が襲って来てこの人に勝つと、頼みの武具をすべて奪い取り、分捕り品を分配する。

当時の社会を支配していたローマ軍、ヘロデ王、宗教的支配層が力と律法を持ち、強制する形では「神の国」は存在しないし、夢見ることもできないということでしょう。

このように「神の国」と関連する数少ない箇所が社会的弱者と関連して語られ、イエスに従っていた数多くの疎外されていた人々に「神の国」が夢となり、その後私たちキリスト者の共通の夢となったことでしょう。(2024 年 6 月 2 日証詞より)